

ベートーヴェンを初めて強く認識したのは小学六年生のときです。音楽会で交響曲第九番第四樂章「歡喜の歌」を合奏したことがありました。

ギターを弾ける隣のクラスの先生がアレンジをして、合唱、ピアニカ、笛、シンバル、打楽器、私が担当するキーボードという編成でした。後半の導入部でリズミカルに盛り上がるところから、かけ上がるようなスケールに移行する部分を託されて、一生懸命演奏した記憶があります。

当時私はすでに数々のクラシックギターのコンクールに出場していて、その三年後にはCDデビューをしました。当時は「演奏家は演奏家の仕事を、作曲家は作曲家の仕事を」という指導方針が主流で、私もギタリストとしての道に専念していました。そういう立場からするとクラシック音楽のなかでもギター楽曲を作つてないベートーヴェンはやや遠い存在だったのです。

のちに、演奏と作曲が両方できて当たり前の大時代もあつたということを学び、その最たる存在として再認識したのがピアノのヴィルトゥオーソ（達人）としても知られるベートーヴェンでした。

ベートーヴェンは二〇代前半で生まれ育ったボンを離れてウィーンに移り住んでいます。私も当時のベートーヴェンと同じ年頃に東京の下町を出てスペインで生活をしたことがあって、その後も二〇代のあいだに何度も、三ヶ月ずつのステイを繰り返しました。その時間を経て、性格が少しずつ変わったとか、音色が明るくなつたと言わわれることがありました。ベートーヴェンは亡くなるまでの三〇年以上という長い期間をウイーンで過ごしたわけですから、その作風に影響があつたことは間違ひありません。

また、クラシック音楽の世界では、「作曲者の楽譜以外のことにも想像を広げなさい」と常に教えられてきました。作曲者がどういう人生を送ってきたのか、どういう人柄だったのかを想見する。俳優が役になりきって芝居に取り組むことに近いのかもしれません。五線譜のなかには書き込まれていないことを勘案し、果ては音符と音符のあいだに込められた人間性を表現することで、聴き手に届くメッセージはどこまでも深みを増していくものだと思います。

机に楽譜を広げて練習を重ねるだけではなく、

音楽家を育むドイツの空気

祈りの音楽家が後世に遺した想い

村治佳織（クラシックギタリスト）

「ベートーヴェンは音楽の神様に祈りを捧げる日々を送っていたのではないか」難聴をはじめとした数々の困難を抱えながらも、世界を魅了する音楽を生み出したベートーヴェンの人間像はどのようなものだったのか——ギタリストの視点から語ってもらった。

